建築の表情と郡山の裏

～意外性が生み出す心地良さ～

きょうもいじめられた、

決めた、３にしよう。そして少年は歩をすすめる

結局６になってしまった

家族の前では強くあろうと誓った少年は、

こうして繊細な心の膜を貼り直し

いつもの通りの小さく大きな背中で、

その道をあとにした

SESSION

1 いじめの中の子供

いじめを受けている子供は苦しんでいる。大人は誰かに相談することが解決に近づくと考えている。それは一理あるかもしれないが、そもそも自分がいじめられている事を人に話すために気持ちを整理すること自体容易なことではない。そもそもそれが最善であると確信を持つことも出来ない。ゆえに子供は行動を起こさず、時間がすぎて環境や状況が変わるのを待つ。

a) 子供の心の中

過敏な反応

今まで気にも留めなかったことにまで恐れを感じて、常にびくびくしながら生活している。

なるべく席にいたい

グループを組まされることで自分があぶれてしまう状況を恐れる。移動教室のない座学の授業を好む。

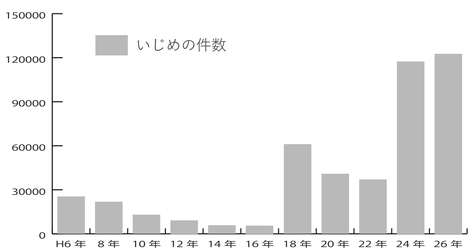
時間稼ぎの遠回り

あまりにも早く帰って家族に余計な心配をかけたくない為、少し遠回りして帰る。

長居は禁物

学校に長いしたくない為、帰りのホームルームが終わると静かになるべく早く教室を出る。

b) 小学生におけるいじめの件数推移



SESSION

2 他者の意識の及ばない拠りどころ

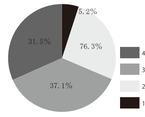
前章でも述べたが、いじめは人の心を敏感にさせ、他人の視線を必要以上に意識させる。いじめを受けている子供には、周りから意識の及ばない、家まで遠回りできる帰路や少し佇める空間を必要としている。今自分に降りかかっている事柄を誰も知らない素に戻れる場所は彼らの計り知れない心の拠りどころをなることであろう。

SESSION

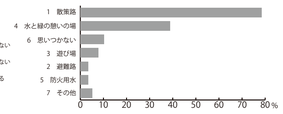
3 奥性を愉しむ「せせらぎこみち」

郡山の地を横断する「せせらぎこみち」は全長３ｋｍにも及び、地域ごとに様々な特色を出している。しかしこの道は通路としての役割から抜け出せておらず、わざわざ足を運ぶ市民は多くない。市民がその特異性を見出し、ここでしか感じられない感覚を知ることで「せせらぎこみち」は必要とされる場へと生まれ変わることが出来る。

市民の利用頻度

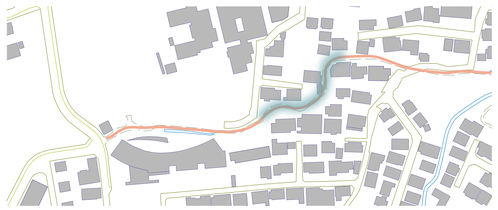


せせらぎこみちのイメージ



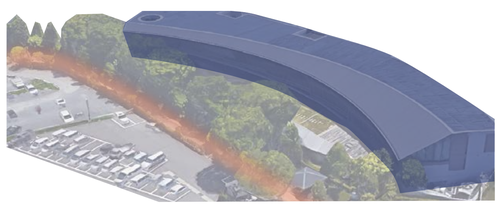
a) 小道と曲線が生み出す奥性

1,200 ～ 2,500ｍｍ程の小道と奥を見通せないようにカーブになっていることで歩を進める程に、包まれ他者からの意識から離れた場所が現れてきて穏やかな奥性を感じることができる。



b) 崖や建築がつくる不動の安定感

この道に沿うように崖や比較的規模の大きい建築が存在感を示しながら道を見守っている。そのため実際に歩いていると道とその他との視線が遮断され、他者の意識の及ばない安心感を与えてくれる。ひらかれた空間より他の意識が及ばない方がより人は素直になり素に戻れるのではないだろうか。



SESSION

4 中心移動によって生まれた裏

安積疏水による開拓の中心であった開成山公園からＪＲ郡山駅へと街の中心が移動したことに伴い、安積疏水は影を潜めていった。しかしそのことで「せせらぎこみち」の持つ穏やかさと奥性が生まれた。

SESSION

5 忘却する故郷の情景

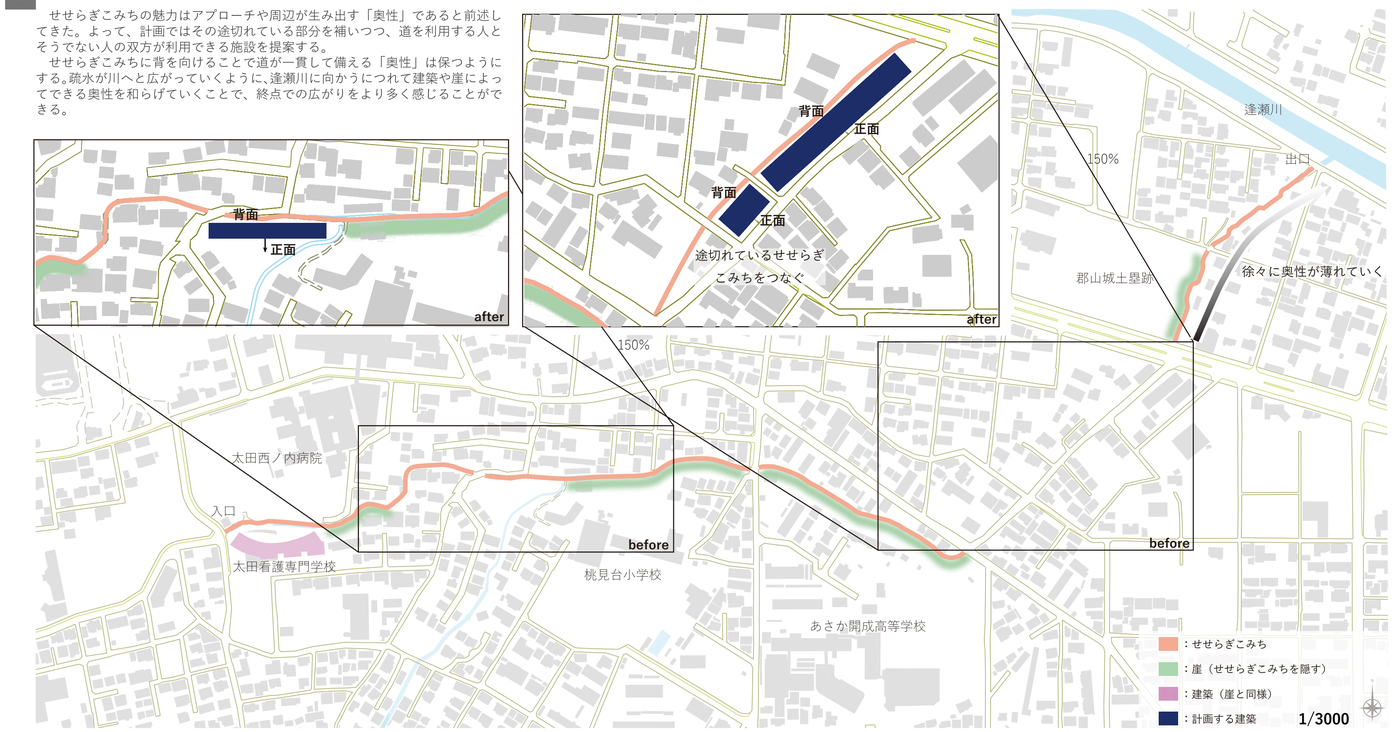
福島県郡山市は先人たちが明治政府に根気強く説き続け勝ち取った、「安積疏水」の開拓事業によって著しく成長した都市である。その疏水が平成の今、「せせらぎこみち」として市民の憩いの場になるようにと整備された。しかし、現状は利用者の少なく、安積疏水は市民の心から忘れ去られているままである。この場所の豊かさを再認識し、「郡山市民の故郷の情景」となるべきだと考える。

SESSION

6 「せせらぎこみち」を繋ぎ、それに背を向ける建築が奥性を生じさせる、という提案

せせらぎこみちの魅力はアプローチや周辺が生み出す「奥性」であると前述してきた。よって、計画ではその途切れている部分を補いつつ、道を利用する人とそうでない人の双方が利用できる施設を提案する。

せせらぎこみちに背を向けることで道が一貫して備える「奥性」は保つようにする。疏水が川へと広がっていくように、逢瀬川に向かうにつれて建築や崖によってできる奥性を和らげていくことで、終点での広がりをより多く感じることができる。



4BEB2214　川音郁弥